

# 經濟論叢

第七十二卷 第三號

---

- 銀行學派のメカニズム …………… 小野 一 一 郎 (1)
- イギリスに於ける國民經濟の軍事化と  
保守黨の經濟政策 …………… 中 村 忠 一 (20)
- 組合漁業をめぐる漁村の實態 …… 柏 尾 昌 哉 (41)
- H・P・エギラス著「イスパニヤ經濟の發展」  
…………… 有 富 重 尋 (62)
- 

[昭和二十八年九月]

京都大學經濟學會

# 銀行學派のメカニズム

小野 一 郎

は し が き

リカードに基礎づけられた通貨學派の体系に對立した銀行學派（「J・ステュアートの無意識的繼承者」トウィーク及びフラートン・ウィルソンにより代表される）の体系を見ると、そのあらゆる諸結論における對立の一貫性に驚かざるをえないだろう。貨幣數量説の否定。貨幣的景氣論の否定。利子論における資金需給説の否定。爲替論における購買力平價説の否定。國際收支論における價格メカニズム論の否定。供給面の輕視等々リカード体系にきびしく對立する一貫性をもつこの体系は同時に政策的見地においても對立する。リカード体系は金量に直結する通貨の統制を結論づけ、他方銀行學派は信用（貸付）の統制を提起する。いはば前者が國內安定の條件として國際均衡を重視するものとすれば、後者はむしろ國內安定そのものを重視する立場に他ならないのである。

これらの諸結論、同時にその短期的性格は著るしく近代적であり、反古典派である。

その一貫せる体系の中に、これ程ケインズの諸結論に一致せる學説を見出すことは他に類を見ないであろう。もとより兩者はその歴史的位位置において、その主体的立場において、その理論構成の諸過程において、又その政策的

提案の内容においても著るしく異つてゐる。けれども、單なる部分的同一性乃至異質性ではなく一貫した古典派的体系への批判的体系である意味において、その諸結論の驚くべき同質性においてみれば、銀行學派以上にケインズ体系に一致せるものは見出しがたいであらう。ハンセンも亦ケインズの理論が貨幣思想史の古き一つの流れを走つてゐることを指摘し、そして所得接近のアプローチにおいて恐らく最初の明瞭な記述をもつものとしてトウ・クをあげてゐる。<sup>3)</sup>

勿論小論はそのような銀行學派とケインズとの類比を論じようとするものではない。又銀行學派内部の異同を論ずるものでもない。

ただリカード体系に對立するこの体系の論理を明確ならしめ、その論理と政策的歸結のもつ謬見を追求しようとする。なぜならリカード体系が次々に新たな近代再生産をとげると同じく銀行學派も又再生産されるのである。その論理は端緒の構造において最も明確に打出されてゐるからである。

何故それが再生産され、復興するのであるうか、それはこの体系の論理そのものの中に秘んでゐるのである。以下、トウ・ク・フラートンを中心に考察を進めることとする。

- (1) 拙稿「リカード貨幣信用論の一考察」經濟論叢七〇卷 六號參照。
- (2) K. Marx; Zur Kritik der politischen Ökonomie, SS. 186—188 宮川實録「經濟學批判」pp. 247—249
- (3) A. H. Hansen; Monetary Theory and Fiscal Policy, 1949 pp. 83, 87.

## 一 銀行學派の諸結論

銀行學派によつて與えられた諸結論、それは既述せるごとくりカード及び迪貨學派の体系の諸結論と相對立する

ものであるが、いまそれを列記すれば次の如くである。

(1) 銀行券流通法則の物價に對する從屬性を指摘し、(「過大發行の否定」)もつて通貨學派の貨幣數量説―物價理論を否定し、消費財價格水準を軸とする物價水準の決定論―所得數量説を提起している。

(2) 通貨學派の無視せる退藏(蓄藏)貨幣の機能を把握し、金の流出入と通貨分量―貨幣價值變動との間の直接的因果關係を否定している。

(3) 通貨學派の亞流貨幣市場理論 (Money Market Theory) の人々(その代表者はギルバート・ボサンケット。オーバーストーンも後にかかる見地をとる。前掲拙稿参照)とは異なり、利子率と信用増發・投機との關係を否定し、利子率と物價との直接的關連を否定し、同時に利子政策の限界を指摘している。それと共に利子決定に關する通貨學派の見解たる資金需給説を否定し貸付資本需給説―貨幣需給説をとる。

(4) (2)の命題から爲替の順逆と通貨數量―貨幣價值との直接的因果關係を否定し、通貨學派の爲替相場論が平價説を樞軸とするものであつたのに對し、銀行學派は爲替相場決定における支拂差額の意義を強調し、平價の問題を第二義的なもの名目的なものと見做している。

(5) 景氣變動―恐慌の要因に關しては通貨學派の貨幣的過剩投資説―資本不足説に對し、恐慌の原因は生産的投資を求めえない貸付資本の過剩―投資の困難にあるとする。則ち貨幣的景氣論の否定。

(6) 國際收支調整の價格メカニズム論を否定し、資本移動に伴う金の移動による國際收支の擾亂と調整の存在を強調している。

以上(1)―(6)にのべた銀行學派の諸命題から生ずる政策的提起は當然通貨學派の提案と異なつてゐる。則ち通貨學

派が金量に直結する銀行券發行の統制、それは同時に爲替相場を基準とする通貨統制策を意味し、それによつて國內安定と國際均衡の同時的遂行を意圖したのに對し、銀行學派はかかる統制による恐慌の激化、該統制策の無効を説き、同時に亞流通貨學派たる貨幣市場理論の利子操作による通貨信用統制方式の限界と無効を指摘する。

かくて銀行學派は前記兩學派の量的統制に反して銀行の直接的な貸出操作（質的選擇的統制）を主張する。けれども彼等はいかかるとの貸出操作の万能を信じたのではない。彼等は恐慌及び金流出の人爲的操作による防止法の存在を否定し、ただそれらを緩和するものとしての役割をのべているにすぎない。即ち信用統制万能論の否定。

以上のごとき諸命題と政策的提案それはいかなる論理のもとに生れてきたのであろうか。

以下既述せる諸結論に到る論理的過程の展開を取上げてみよう。

## 二 銀行學派のメカニズム

(一) その貨幣論 銀行學派と通貨學派との對立の基礎はまずその貨幣理論において與えられている。銀行學派貨幣論の特徴は通貨學派が流通手段形態においてのみ把握した貨幣をより多面的に考察した点に求められる。第一に彼等は貨幣としての貨幣たる金と強制通用力をもつ鑄貨、紙幣等の價值章標と信用貨幣の三者の異質性を把握していた。第二に銀行券、爲替手形、小切手の信用貨幣としての同質性を強調した。第三に彼等は通貨學派の看過した退藏貨幣の存在を把握していた。

以上の諸点こそ爾後の諸結論を生み出す起点をなすものである。だが就中銀行券流通法則の定式化こそその中核をなすものに他ならなかつた。この点についてフラートンは次の如く述べている。彼によれば金銀とはそれ自身

價値ある商品であり、その價値の變動はそれを通貨として使用する政府・社會によつて如何ともしがたい客觀狀勢に左右される。金銀と同じく貨幣としての範疇に入る鑄貨・不換紙幣は權力者によつてその價値が賦與される慣習的な交換手段であつてその價値はそれを管理する權力者の裁量により決定される点で前者と異なる。ところが社會の發展に伴ひ信用の相互取引において重要な役割を演ずるようになり、上記の貨幣を交換する必要にとつて代るのである。則ち信用は貨幣に對する止當な代用物となる。ここに新たな法則と原理があらはれるのであり信用と貨幣の間に儼たる限界線が劃されている。銀行券は信用の一形態であり銀行券は銀行業者の要求拂約束證に他ならない。だから銀行券はその代表する貨幣價値とともに騰落する以外減價するものではない。銀行券はだから通貨學派の考えるように不換紙幣と同一ではない。しかも銀行券は信用の一形態に他ならないのであつて他の信用形態たる爲替手形、銀行小切手と本質的に同一物であり、通貨學派の考えるように銀行券と爲替手形・小切手との間に差異があるのではない。以上のフライトンの考え方はトウークにおいても又同様である。

かかる貨幣形態の分析の上に信用貨幣の一形態たる銀行券流通法則が樹立されるのである。フライトンによれば銀行券の流通は發行者の意思から獨立して社會の需要に伴つて起るものであつてその發行はかかる需要をこえて起りえず、不要の銀行券は直ちに銀行に回流し、物價騰貴を生ずることはない。銀行券は二つの基準により不換紙幣と區別されるのであつて、一つは「發行方法」であり、一つは「環流の法則」である。銀行券の發行は銀行の割引貸付により發行され普通短期で回收される。しかも取引の多くは帳簿信用で處理され、その場合には銀行券はただ所有をのぞむ人々に對してのみ發行され、その必要量の多少はひとえに銀行券の使用される特殊の用途によるものであり、全く社會の需要によつて決定される。正常なる状態にあつて銀行券發行の過多を不可能にするものは銀行

券の金兌換よりはむしろ環流の規則性にある。通貨學派はかかる銀行券流通の特殊性を理解せず、銀行券と紙幣とを同一視する誤りをおかしたのである。銀行券に關する限りそれは手形割引によらず、たとえ地金と引換えに發行され、或ひは政府證券購入の形で行われようと事態はかわらない。地金の買入の場合において、英蘭銀行が公衆の必要とする額以上に銀行券を發行しても割引市場を通じて直ちに英蘭銀行に環流する。則ちそれらは割引市場に流入して英蘭銀行に對し割引に向ふ爲替手形を横奪する。かくて英蘭銀行はそれだけ貸出が減少し、他方既存貸付の環流により同額の銀行券が回流するからである。同様に國庫證券、株券その他長期證券購入のための市場に銀行券を投じてても必要量以上の銀行券は英蘭銀行に復歸して市場を横溢せしめない。事實有價證券保有と銀行券數量は逆比例的に變動するのである。以上が銀行學派による銀行券流通法則の把握である。

次に彼等の退藏貨幣論に目を轉じてみよう。通貨學派が流通手段としての規定において貨幣を一面的に把握したのに對し、彼等は退藏貨幣の存在を把握していた。フーントンによれば退藏金は流通中の通貨量に影響を及ぼさず必要以上の金は退藏貨幣として存在する。信用制度下においてかかる退藏貨幣は銀行の準備金となり、銀行に集中されるのであるが、この場合においてもかかる退藏金の増減は既述せる如く通貨學派の考えるように流通通貨量と比例的關係をもたず物價に影響を與えない。金の流出入はただこの退藏貨幣の準備金の増減、それは一方における預金の増減となるのみであり、流通通貨量と無關係であるとのべている。トウークもほぼ同様である。

だがかかる貨幣論は次の諸点においてあやまつている。則ち第一に彼等は貨幣と信用の明確な區別を樹立する点において正しいが銀行券が主として手形割引により貸出され、それが主として支拂手段としての規定において機能する所から物價水準に對し中立的なる所以をとくのであるが、銀行券は手形流通に依據しつゝ一般流通に入りこむ

のであり、單に支拂手段としてのみでなく流通手段としても機能するのである。<sup>6)</sup>

第二に中央銀行信用の一形態としての銀行券は私的信用たる商業手段（この場合減價は個別的に、しかも全く無價値となる）と異なり、國家信用を背後にもつ紙幣性<sup>7)</sup>—一般的減價性から脱却しえない。このことは第一の点にその基礎をもつわけであるが、銀行學派は銀行券に秘むこの手形性と紙幣性の二重形態を通貨學派が紙幣性において把握したのと反對に、手形性において理解した。しかも手形そのものに秘む價值章標性を看過し更に中央銀行信用のもつ一般的減價性—紙幣性の強化を無視して。けれども彼等が彼等の視角からは本來第二義的な兌換性を要請せざるを得なかつたのは事實においてかかる減價性が存在したからなのである。

第三に彼等のいう銀行券は社會の需要に應ずるものであることは銀行券の紙幣性を否定することにはならないことである。銀行學派はこの社會の需要に必要な銀行券量を直ちに流通に必要な銀行券に等置している。社會の需要に必要なといふことは資本にかかはることであり、流通に必要なことは商品流通に關する概念であり兩者は同一ではない。社會の需要—資本の需要に應ずる銀行券發行が商品流通に必要な通貨量を超加する場合には減價は當然問題となるのである。以上の諸点はたとえ割引貸出が短期的であり、環流が順當に行はれようともさげえない性質のものである。銀行學派はこの点を看過したのである。

第四に彼等の退職金の増減が流通通貨量・物價と關連を有しえないということは正に達見であるが、そのことは彼等のいう如く金の流出入が資本の問題であり、利子率によつて左右されるということにはならない。この点について後にふれることにする。尙彼等の紙幣價值決定論の謬見についてはここではふれぬ。

(1) J. Fullarton: On The Regulation of Currencies, 2nd. ed. 1845, pp. 29—38 福田譯「通貨論」pp. 51—61



(2) T. Tooke; *An Inquiry into the Currency principle*, 1st ed. 1844, chap. III—V 玉野井譯「通貨原理の研究」三章—本章

(3) J. Fullarton; *ibid.*, pp. 63—67, pp. 82—97, 邦譯 pp. 84—94, pp. 110—128

(4) *ibid.*, pp. 76—79 邦譯 pp. 104—108

(5) T. Tooke; *ibid.*, pp. 9—15 邦譯 pp. 43—51

(6) K. Marx; *Das Kapital* III/S. 485 長谷譯「資本論」第十分冊 p. 221

(7) 藤塚知義氏「信用理論發達史上の一响」金融經濟 四號 p. 38

(8) K. Marx; a. a. O. S. 487 邦譯 第十分冊 p. 225 川合一郎氏「金本位制について」經濟學雜誌 二十七卷 四・五號 p. 80 藤塚氏前掲論文 p. 25

(二) 銀行學派の循環視角 以上の如き貨幣論それはいかなる彼等の循環視角と結合するのであろうか。この点につきトウクの指摘する貨幣流通の二區分則ち「資本の流通」と「所得の流通」への區分は注目されねばならぬ。彼において貨幣流通は上記二つの領域に分たれ、商人と商人との間の貨幣流通は資本の流通であり、それは多くの場合帳簿信用による相殺によつて完成される。この場合銀行券の發行も殆んどなく、たとえそれが發行されるとしてもそれは單に既存の債務請求權たる手形に代つただけであつてその額はすでに決定された商品價格に追隨しそれによつて規定されるのである。だが所得の流通則ち商人と消費者間の流通においてはそれは通貨の流通であり、それは大部分鑄貨によつて、および一部小額の銀行券によつて行はれる。この場合には前者と異なり通貨の數量は物價に作用するとみるのである。即ち前者の場合貨幣は主として支拂手段として機能し、後者の場合貨幣は流通手段として機能している。銀行學派はこれを則ち貨幣の機能形態の區別を資本の流通と通貨（所得）の流通の區分に直結し、銀行券流通を主として前者に結びつけ、これに環流法則を附加することによつて銀行券の物價に對す

る中立性を主張したのであつた。かくて先述せる退藏金と貨幣價值・物價との關連の把握も又ただちに導かれるのである。何故なら通貨學派は銀行券と金量とを直接的關連において見ていたのに對し、ここでは銀行券は主に商人と商人との間の取引需要、社會の需要により決定され何ら金量に依存せず、その價值も亦現存金量から獨立し、その間には何の關係も見出されないからである。

このことから彼等の循環視角は明らかとなる。則ち彼等においては通貨學派の循環視角において貨幣は資本（生産資本）循環の中斷、媒介物としてとらえられその結果貨幣は流通手段として定式化されたのとは異なり、信用貨幣は資本の需要に基ずいて貸付によつて與えられ（ $G : G$  貸付）通常短期的に環流する（先行商品販賣の現金化の完成と返却即ち  $W : G : G$  返済）という視角の上に立つている。いはばそれは  $G : G : G : W : G : G$  なる範式の見地となる。兩極を絶對化すれば  $G : G$  となり純粹利子生み資本の循環視角となるが彼等においては貨幣資本循環の視角と混和せる視角となつて表はれている所にその特徴が見出される。かかる見地にたてば、銀行業者が與えるものが流通を中斷する通貨であるという見地は出てこない。何故なら銀行業者は資本としての貨幣を貸付けるのであり、それは不換紙幣の如く流通界に止つて横溢することなく環流するからである。彼等がさきに銀行券流通法則を定式化する場合「發行方法」と「環流法則」を重視したこともかかる見地に基くものといふるのである。

以上にのべた循環視角と貨幣視角の相互規定性の上に構築される利子論はいかなるものであろうか。

(6) T. Tooke : *Ibid.*, chap. VII 邦譯第七章

(三) 利子論 通貨學派が利子決定の要因を利潤率を樞軸とする現實資本（生産資本）の需給において考察したのに對し、彼等は利子をこれらと直接關連することなき純粹に貨幣的現象として考察せんとしている。

彼等によれば通貨學派も貨幣市場理論も共にあやまつている。前者は現實資本との直接的關連において利子を考察し、後者は通貨量 $\parallel$ 貨幣價值との直接的關連において利子を考察している。いずれもそれらは貸付資本の獨自性を看過し、同時に退職貨幣・預金の存在と貸付すべき貨幣資本蓄積の特質を見失つてゐる。銀行學派はこのことを認識してゐた。だから彼等にあつては利子は利潤率の基礎から同時に貨幣數量・貨幣價值から開放されてゐる。彼等にあつては利子は貸付資本の需給によつてそれは規定されることになるのである。同時に彼等はこれら貸付貨幣資本がその流通において常に産業資本に直結する機能を果すのではなく、有價證券市場に流入し獨自の流通をとげることも把握してゐる。けれども利子はその形態において種々なる變動の幅をもつとはいへ資本制生産の基礎に於いては利潤率に究極の基礎を置いてゐる。何故なら利子はいかに資本機能の果實として獨自の範疇をもつとはいへ利潤の一免除部分に他ならないからである。トウークはかかる命題を忘れ、利子を利潤と異なる獨自の範疇となし、利潤に對する利子の先行性を強調してゐる。かくてこの視角からは利子こそが純利潤の尺度となる。通貨學派が利子決定の究極の基礎を絶對化しその相對的獨自性を忘却したとすれば、彼等はその相對的獨自性を絶對化したものといえよう。

(10) T. Tooke, *Consideration on the state of currency*, 1826, p. 10 當時トウークは尙通貨學派の影響下にあつたとゞわれてゐるが利子論においては既に明確な對決を遂げてゐる。そして利子決定の原因についての敘述は「通貨原理の研究」に於てはなされてゐる。 J. Fullarton, *ibid.*, p. 71 邦譯 p. 98

(11) T. Tooke, *History of Price Vol. II*, 1838, pp. 355—360, *Consideration* pp. 7—10

(12) T. Tooke; *Consideration*, pp. 7—9, p. 12

(四) 爲替論 通貨學派においては金流出の原因は銀行券の過大發行による減價にその原因が求められ、爲替相蕪もまた貨幣價值の問題として一義的に考察されたのであつた。則ち貨幣價值下落↓爲替相場下落↓金流出。けれど銀行學派においてはそれとは逆に對外支拂差額こそ爲替相場變動の第一の原因であり、平價の變動は第二義的(名目的)なものにすぎないとされる。<sup>13)</sup> けだし銀行券の發行が何ら貨幣價值に影響をもたず、且過剰發行されえないといふ彼等の論理の上には平價論は樹立しえず、且退藏貨幣の存在をみとめる彼等において金の流出入はそれ自身何ら通貨數量||貨幣價值に影響を及ぼさない筈であるからである。かくて彼等にあつては爲替相場及び金流出入の問題は通貨學派の考える如く貨幣價值と一義的な關係をもつものではないことになる。だから彼等においては爲替相場の變動及び金流出入の問題は専ら支拂差額の上にその原因が求められるに到つたと考えられる。<sup>14)</sup> フラートンは金流出の原因を詳細に分析している。彼によれば、第一に金流出はその直接的使用と消費のための需要(單に商品金の輸出のみではなく軍事基金補充等の突發的な原因に基づくものを含む)或ひは不信や驚愕に發する退藏のための流出が存在する。この場合には需要は直接金そのものに對するものであり、流出は支拂差額、爲替と無關係である。第二に商品流入超による支拂差額決済のため流出する。第三には外國證券への大規模な資本投下による對外負債の發生及び投機と過大貿易により流出が行はれることを擧げている。<sup>15)</sup> 彼等はかかる金の移動をすべて資本の移動と考えていた。だから通貨には影響をもたないことになる。けれどもいかなる原因に基く金の移動にもせよ商品金の場合を除いて、金はその場合ただ貨幣の資格において、國際的支拂手段としての貨幣商品金として流出したのである。ところが彼等にあつては地金は退藏貨幣の視点において見られ、それは潜在的な貨幣資本と考えられたのであり、かくて事實において金流出、支拂差額の内容を夫々の要因に分けて考察しつつも貨幣資本の移動と支拂差額の關連を重視する

結果となり、しかもその關連が最も直接的な第三の要因を重視する結果、先述せる如く彼等は退藏貨幣の増減 $\parallel$ 金流出入の利子率による影響を重視することになつたのである。けれども上記せる如く通貨に影響を與えぬことが金流出を資本の問題として論じうる根據となるものではない。このことは既にマルクスの指摘せるところであつた。<sup>17)</sup>

爲替相場についての彼等の考察はその變動要因の序列において正しい位置におかれてゐる。だがそれは序列においてであつて爲替相場そのもの本質規定においてではない。彼等は爲替相場を對外債權の讓渡價格としてとらえ、ただその價格の動搖が貨幣價值 $\parallel$ 平價によらず支拂差額に基礎をおくといふのであつて要因の序列を度外視すれば平價説と同じく價格論の平面において相場現象を問題とするに止まつてゐる。<sup>18)</sup>

以上に明らかなきごとく彼等の視角展開が彼等の貨幣論及び資本把握の特質に基づくものであることは明らかである。しかれば以上の彼等がよつて立つ基礎的諸範疇の上に構成される物價・恐慌・國際收支論はいかなるものであろうか。

(3) J. Fullerton; *ibid.*, p. 115 邦譯 p. 149 (4) *ibid.*, 116 邦譯 p. 150 (5) *ibid.*, pp. 153—161

邦譯 pp. 192—201 (6) *ibid.*, p. 130 邦譯 p. 165 T. Tooke; *Inquiry*, p. 14 邦譯 p. 50

(7) K. Marx; *a. a. O.*, S. 494 邦譯 第十分冊 p. 289

(8) この点については川合一郎氏「爲替相場の本質」經濟研究九号 松井清教授「貿易金融と爲替問題」經濟論叢 七十二卷一号參照。

a 所得數量説および利子と物價 貨幣數量説を否定せる彼等が提起した物價理論それはトワークにおける所得數量説であつた。既にのべたように資本流通を媒介する信用はそれ自体物價に對し中立的であるが、所得の流通を媒介するものは通貨であり、流通手段である。だから物價水準は貨幣量によつて規定されるものではないが、所得

形成に影響を與える貨幣數量によつては影響される。かくて彼等においては消費者のポケットに入る貨幣數量 $\parallel$ 所得數量に關連する消費財價格水準決定論を一般物價水準論に優先せしめ、同時に商人と商人との間の取引量は究極的には商人と消費者間の取引量に等しいというスキスのドクマを繼承することによつて物價水準一般の消費財價格水準による規定性を論じている。だから所得流連を荷う一部小額銀行券は長期的には價格水準に影響を與えることになる。<sup>20)</sup>

かかる謬見の原因はすでに彼等が資本の貨幣形態と所得の貨幣形態の區別を資本と通貨の區別と混同し、流通手段としての貨幣をすべて通貨と見做したことに起因する。

けれどもかかる謬見そのものよりも彼等が通貨學派と異なり單に貨幣數量ではなく、同じく數量説でも本來は資本に關連した所得なるより高次の範疇視角より物價を見たこと（彼等自身このことを意識したわけではないが）、消費財價格水準の優位を見たこと。及び所得の中樞をなすものは勞賃であることから物價下落を賃金の低下（その逆は逆）に見たことは注目されねばならない。小額銀行券に關して、銀行券が物價に追従するという銀行學派の論理はここに一つの讓歩を行うのであるが、そのことは彼等の論理の矛盾ではなく反對にその貫徹の故の矛盾に他ならぬ。

次に彼等が利子と物價をどう見ていたであらうか。貨幣市場理論は貸付貨幣資本の豊富 $\parallel$ 貨幣價値の低下 $\parallel$ 利子率低下という彼等の論理から（その逆の場合は逆）低い利子率が高き物價の原因であり、同時に投機の原因であると考えられる。トウワークによればこのことはあやまつている。彼にあつては逆に低い利子率はそれだけ生産費を引下げ、商品價格下落をひきおこし、反面有價證券價格の騰貴を惹起すると考へている。同じく彼によれば低き利子率はた

だそれだけでは投機の原因となるものではない。投機は利子率乃至割引率を無視しうる程大幅な價格騰貴の見込みか或ひは適當な期間にそれが實現される見込みがなければ借入資本をもつて行はれるものではないと考えるからである。かくて彼は銀行券と物價及び景氣變動を一義的に結びつける通貨學派と同じく利子率と物價及び景氣變動を結びつける貨幣市場理論を排撃する。彼が貨幣市場理論の如き利子と物價の關連を否定したことは正しい。だが彼が利子を一つ費用として考えたことは間違つてゐる。利子の決定機構と價格決定の機構は基本的に異なつてゐる。だが彼は低利子 $\parallel$ 低物價に結びつけたのであるが高利子 $\parallel$ 高物價に直ちに結びつけてはいない。歴史家としてのトウークは彼自身の論理に反撥する。だから彼は一般に事實との關連において利子と物價との一般的な關連を見出してはいない。しかしながらこのことは論理的には彼が貨幣市場理論と違つた意味で先述せるように利子と物價との關連を認めたといふことを否定するものではない。それは彼が利子を利潤の一控除部分として見る事が出来ず利潤から絶体的に獨立して決定される本源的所得と見たことに起因する。かくて彼は貨幣資本の價格なる商品價格の決定とは全く異つた利子を、需給による決定というもつとも表面的な同一性においてとらえ、その價格を逆に商品價格構成要素として考へるといふ誤謬を冒すことによつて上記の謬見を生むことになつたのである。利子を現實の實踐において費用と見做すことと利子が商品價格を動かすことと同じことではない。彼の歴史的な分析が時に彼に反撥するのはこのような彼の論理的な誤謬に基因するのである。

(6) T. Tooke; *Inquiry*, chap. XII 邦譯 十二章 (20) *ibid.*, p. 82 邦譯 p. 75

(7) *ibid.*, chap. X 邦譯 十章 (21) *ibid.*, p. 84, p. 159 邦譯 p. 148, pp. 208—209 このことをトウークが明確にのべたのは「通貨原理の研究」第二版においてである。これについては一谷藤一郎氏「金融統制の理論」P. 149 参照。

**b** 恐慌 以上に明らかなる如く銀行券發行の物價に對する中立性を主唱し、利子と物價の關連を切斷し、信用と投機との直結的關係を否認する銀行學派は當然恐慌の要因を主として貨幣量、利子率、總じて貨幣、信用の部面に求める通貨學派及び貨幣市場理論に對立することはいうまでもない。トウークにあつては恐慌の根本原因は専ら投機を根幹とする財貨の需要供給の側に求めている。フラートンはかかる投機の誘因を安全にして生産的な投資口を見出すことの出来ない資本（貸付貨幣資本）の過剰蓄積に求めている。いわば現實資本の蓄積に先行する貨幣資本の過充、投資の貧困こそ投機の原因であり恐慌の原因と見なしている。<sup>23)</sup>

われわれはかかる恐慌論が彼等の基礎範疇そのものの論理的な歸結であつたことを指摘するとどめ、次に彼等の國際收支論に目を轉じてみよう。

② T. Tooke; *ibid.*, chap. X ■ 邦譯 十三章

③ J. Fullarton; *ibid.*, p. 169 邦譯 pp. 210—211

**c** 國際收支 既述せるように金の流出入と通貨量・貨幣價値・物價との關連を否定せる彼等——同時にそれは爲替相場の變動と貨幣價値の變動を同一視しない立場である——が、<sup>25)</sup>通貨學派の考えた通貨原理の實踐による價格メカニズムを通しての均衡原理を否定したことは當然である。フラートンは通貨原理のいう均衡が成功するのは銀行券發行の制限ではなく極端な融通の制限・收縮によつてであり、それは縮少均衡——崩壊による調整に他ならず、それすら必ずしも輸出増加を齎さず金流出を防止しえないことを指摘している。<sup>26)</sup>更に金の流出についての前記フラートンの見解に明らかなように、彼等は通貨學派が看過した資本移動に着目し、金流出と資本移動の關連を追求し、支拂差額の内容をより詳細に觀察したのである。しからば支拂差額を調整し（それは同時に爲替を調節することである）



金流出を調節する手段は何であるか。

フラートンは英蘭銀行が一定の條件の下において物價に作用し、しかも金の流出防止を遂行する力をもつてゐることを認める。けれどもそれは銀行券發行高の制限ではなく、融通（貸付）を拒絶することによつてであり、しかもそれは個人信用が激しい動搖をうけ公衆が英蘭銀行に依存せざるをえない一時期に限られている。ところがかかる時期に融通を制限することは激烈な反作用を及ぼすのであり、このような方策は戒しむべきであると主張する。かくて彼は金利調節をもつて物價變動を通ずる調整に比べて遙かに御しやすく安全な手段と見なしている。何故なら外國證券投資の普及により、對外負債をカバーするものは金や商品の外に證券の移動が加わつたからであり、かかる證券の價格は市場金利の變動により騰落し、證券自体は金利の高い所から低い所へ移動するから、金利の變動は爲替調整上やや重要な手段となつたといふのである。このことは先きの資本移動を重視した考え方に相應するものといえよう。だが彼によればかかる方法が奏効するのは限られている。何故なら英蘭銀行が市場金利を規定し、統制することの可能性は全く公衆が同行に對し依存状態におかれる一時期にかぎられているからである。しかも金流出は既述したように決して統制しえない種々の原因によつて起るのであり、つまりるところ一般的に金流出を阻止する方法はないと結論している。とはいえ彼は金流出が無限に續かないことを彼の論理から説明する。彼によれば流入金は必要量以上に流通に入り込まないから金流入國では金の退藏が起り、金利が下がる。この退藏貨幣を有利に運用しようとするればその國における資本の使途には制限があるから結局高金利國への再輸出によつて調整されるというのである。<sup>37)</sup>かくの如き資本移動の機構を重視し利子に着目せる國際收支調整過程は通貨學派が金流出の契機を貨幣價値の變動に求めたのと對照的であり、貨幣のより高次の範疇段階を見ていたことを意味している。たし

かに短期的には資本移動（彼の場合にはすべて貸付資本）は支拂差額に對し、商品貿易よりも敏感に反應しうる。だが反應しうることは常に反應することを結論づけるものでもなく又それによつて基礎的均衡が成立するわけでもない。

④ いかなる國際收支論を構築するかはもつとも直接的には當該理論がいかなる爲替論をもつかによつては決定される。

⑤ J. Fullarton; *ibid.*, pp. 137—139. 邦譯 pp. 173—175 ⑥ *ibid.*, pp. 147—153 邦譯 pp. 185—190

⑦ J. M. Keynes; *The German Transfer Problem*, in: *The Economic Journal* Vol. 39, 1929 p. 6.

### 三 銀行學派の實踐的提案とむすび

以上の銀行學派の論理構成及びその展開から出てくる實踐的提案は何か。彼等は既述せるごとく信用をもつて投機の原因とは認めなかつた。けれども信用がその主要要因でなくとも投機を激化せしめるものたることを否定してはいない。けれどもかかる攪乱要因は銀行券數量自体の中にあるのではなく、利子の中にあるのではない。問題なのは融通（貸付）である。何故なら信用の供與は必ずしも銀行券を要せず、且不要の銀行券は回流しても貸付は残る場合が存在するからである。だから彼等にあつては統制すべきは信用の濫用であるということになる。かくて「確實な擔保による信用の供與」が要請されるのである。勿論それによつて經濟社會の安定が完全に期待しうるものではないが激しき恐慌を豫防緩和しうるというのである。このことは銀行券數量、利子及び物價の關聯を切斷する彼等の當然の決論であるといえよう。

第二に彼等は兌換性の確保、充分な金準備の必要を強調する。だが銀行學派が通貨學派と同じく兌換性を強調し

たからといつてその考え方は同じではない。通貨學派は單に兌換のみではなく直接金量に銀行券發行量を結合せしめる方策を主張したのである。フラートンによれば銀行券發行の過多を不可能とするものは兌換よりもむしろ還流の規則性にある。(既述)ただ兌換は國內の不信を防ぐ唯一の有効な防衛であり、爲替上の激しい攪亂を防ぐ最適の方法であり、健全かつ有効な通貨制度の一根本條件であるとのべている。このことは同じく完全兌換を指向するも通貨學派と異なる視角に立つものであることを示している。だから彼等にあつては第一の統制が主要な問題として強調されたのである。このことも彼等の論理そのものからの歸結であるといえよう。

以上の銀行學派の論理・展開それは一八二五年・一八三六年―三九年恐慌の中に生れ當時における地方銀行、産業資本を代言する一の論理的地盤でありその武器であつた。思うに不況恐慌期こそ、彼等の論理を支える物質的基盤(資本過剩・投資の貧困・退蔵貨幣の増加・價格の低下に拘らず輸出の不振等々の)が存在するが故である。けれどもかかる銀行學派がかつての地金論争における非地金主義者の論理に連なるものであつたことは皮肉である。何故なら銀行券過剩發行否定の論理はその場合他ならぬ非地金主義者たる英蘭銀行理事者たちの主張であつたからである。銀行學派はかくて通貨學派と同じくその社會的基礎を歴史の齒車と共に變えて主張され、その近代的改装をほどこされて再現する可能性を、そしてその再現が慢性的な不況と停滞下の中にある全般的危機の段階において、古典派以上にブルジョア經濟學の支配的學說として認められる可能性を自らの論理の中にもつていた。そのみではない。この視角に立つときは非地金主義者と同じくインフレはただ財政インフレ―不換紙幣インフレのみとなるのであり、銀行券に秘められた一般的減價性―紙幣性は排除され、社會の需要―資本の需要に應ずる通貨需要―銀行券増發はインフレを増進せしめぬという結論に導かれるのである。このことはかの第一次大戰後のドイツインフレ―

シオンをインフレならずとし、第二次大戦後日本のインフレをインフレにあらすと主張する論者の魂に宿つてい  
る。だからそれは單なる不況期にのみ支えられる論理ではないのである。あたかもケインズがそうであるように。  
かくて彼等の論理は古典派体系に對立するすべての体系の中に自己を再現せしめ、今尙生き生きとした生命の燃  
燒をひんげつてゐるのである。

- (1) T. Tooke; *ibid.*, pp. 86—88 邦譯 pp. 146—147 (2) J. Fullarton; *ibid.*, pp. 168—178 邦譯 pp. 204—216  
 (3) *ibid.*, p. 195. 邦譯 p. 241 (4) *ibid.*, pp. 226—227 邦譯 p. 278  
 (5) J. Fullarton; *ibid.*, p. 67 邦譯 p. 98 T. Tooke; *History of Price Vol. II* 1840, p. 177  
 (6) J. Fullarton; *ibid.*, p. 229 邦譯 p. 281 (7) *ibid.*, p. 67 邦譯 p. 98

(一九五三・六・三)

## 執筆者紹介

小野 一 郎	京都大學 助手
中 村 忠 一	甲南大學 講師
柏 尾 昌 哉	關西大學 講師
有 富 重 尋	京都大學大學院學生